

極東に於ける鑛物資源と將來の開發

石 川 成 章

文化の進歩發展に伴ひて種々の鑛物利用法が案出せられ、鑛物消耗額の年々急劇に増加するは顯著な事象で、鑛物資源埋藏の多少は、國力の伸張に重大の關係ある事言を俟た無い、從て

世界列強鑛物資源の爭奪は、大戰前後より年々其深刻味を加へ來つゝある、就中重量も容積も多大なる石炭や鐵の如き鑛産物に至りては、其運搬距離の遠近、交通機關の設備如何により、開發利用上に直接の影響が頗る重大である、前世紀の末迄は鐵、石炭の産額に於て、英國は世界の覇者であつたが、二十世紀に入り、北米合衆國は新進氣鋭の勢を以て擡頭し來り、幾干も無く英國を凌駕して、世界に覇を唱ふるに至つた、從て從來の世界交通運搬は、主に大西洋を中間に挾んで行はれたものであつたが、今や太

平洋を中心として盛に行はるる事と爲つた、從て極東に於ける鑛物資源が世界注目の的と爲るに至つた。

現時に於て、世界の大勢を通觀するに、鐵や石炭の如き鑛物を多量に産出し、最も自由に且つ多量に消費する國が、最も文化の進歩した國である、例せば北米合衆國に於て、一八二〇年には、國民一人當り僅に五「ポンド」の軟鐵を産出したに過ぎなつたが、百年後の一九二〇年には産額百十九倍に増加し、一人當り五九七「ポンド」と爲つた、鐵道や自動車、電線、ラヂオ等の普及は、鑛物資源の開發によりて惠まれた今尙世界の大部分に於ては、主に草木や毛皮や帛布を用ふる、祖先傳來の生活様式により、鑛物資源の開發利用が少ないから、未だ「鑛物時

代」が提供する進歩した文化が享受する事が出来ぬ、現に我國に於て、汽車、電車、自動車、ラヂオの如き文明利器の普及が、遙に米國に及ばぬのは、種々の原因があらうが、鑛物資源の多少と、其開發の尙幼稚の域にある事が最も重要な原因と謂ふべきである。

極東に於ける鑛物資源が果して貧弱なりや否やを講究するに、支那の石炭、鐵は頗る豊富な資源であり、印度、支那、サイアム、馬來諸島、蘭領印度、佛領印度等に於ても、尙探鑛甚だ不完全ではあるが、鐵、石炭、石油等の資源が有望である。と目指されて居る、日本の銅、石炭は尙増産の餘地があり、滿蒙からサイベリアにかけて廣大なる地域は、今後の探檢開發に俟つ處多大なものがあるから、決して輕率に悲觀すべきものではないが、更に仔細に比較考究するに支那の石炭資源に就ては、世界の石炭資源を調査し、一九一三年加奈太に開かれた萬國地質學大會に提出した、ドレーキ(N. E. Dike)氏によれば、九九六、七九五百万噸と報告せられ

我邦地質調査所長井上禧之助博士は、蒙古、雲南、貴州等を除き、三九、五六五百万噸と計算せられ、大正十五年(民國十五年)中國鑛業紀要によれば、二一七、六二六百万噸と計上せられた。

省	噸	省	噸
京兆及直隸	二、八二八	浙江	一一〇
奉天	一、二八五	黑龍江	三六七
熱河	六六〇	吉林	一、二九八
山西	二二七、一五	湖南	六、〇〇〇
河南	七、四四九	四川	一九、〇〇〇
山東	二、五三〇	陝西	六、九六八
安徽	三五八	雲南	一九、〇〇〇
江西	八九五	貴州	一九、〇〇〇
湖北	四四八		

次に支那の鐵資源に就ては、大正十五年中國鑛業紀要によれば、總埋藏量は九五一・七百万噸と報告せられ、其内譯は左の通りである。

省	百萬噸	省	百萬噸
奉天	三八七	山東	三〇
直隸	九一	江西	一八
湖北	五二	福建	七
安徽	五〇	河南	三
江蘇	三五	浙江	二

此總埋藏量は、北米合衆國に於ける鐵の堪採掘量の僅に五分一に過ぎ無い、テゲングレン(Tegengren)氏は、支那に於ける鐵の堪採掘量を三九六百万噸とし、レイス(Laith)氏は尙一層嚴密に講究して一〇〇百万噸にまで減じた、斯くては、人口に對比し、將來自國だけの供給にさへ不足を告ぐるであらう。

石油に就ては、最近迄の調査によれば、支那に於て將來開發せられ得べき油田は、僅に二個處に過ぎないが、如何ほど有利に見積りても、其産額は北米合衆國の産額の百分一には達し得無いであらうと考へられて居る。

支那の石炭資源に就ては、假りに最も計數の大なるドレーキ氏の得た結果を用ふる事とし、石炭と鐵の資源に就き、支那と北米合衆國、日本と以太利とを對照すれば左の表に示す通りである。

國名	面積	人口	鐵物資源	一人當り鐵
	(平方哩)	(單位千)	石炭	噸
支那	四、七、八、三、五	四、七、七、七、九	一、〇〇	二、三、三、〇

斯く對照檢味して見れば、支那に於ける鐵物の大資源を以てして、尙遠く北米合衆國に及ばざるものがある、又以太利は鐵、石炭の如き鐵物資源の貧弱な爲めに、列強の間に伍して從來幾多の困難を経験したが、我國民は大に之に鑑みる處がなくてはならぬ、將來の文化が益々「鐵物時代」を現出するに當りては、我國民は百方苦心努力して、國內の諸有鐵物資源を最も有利に開發しなければならぬのみならず、四面環海で交通便利なるを利用し、更に外に向て手足を延ばし、滿、蒙、サイベリアから、支那、佛領印度、蘭領印度、サイアム、馬來諸島に至る間の極東の鐵物資源開發に大に貢獻する所があらねばならぬ。

(完)